

国際協力1 JICA「ラムサール条約・生物多様性条約に係る湿地の保全と利用」研修

2010年5月17日(月)から6月29日(火)まで、JICA(国際協力機構)帯広国際センターによる集団研修「ラムサール条約・生物多様性条約に係る湿地の保全と利用」を受託しました。

この研修は環境省の主管により、湿地の保全と賢明な利用の推進のために、各研修員が自国で解決すべき課題を整理し、解決策となる具体的な事業案を企画・実施することを目標としています。2回目となる今年度は、3カ国(インド、マレーシア、フィリピン)より自然保護政策担当者や自然保護官ら5名を受け入れました。

研修は東京近郊・富士吉田、沖縄、北海道釧路地方の4地域で行われました。研修員は各地の普及啓発・研究施設のほか、エコツアーや環境教育などの現場を訪れ、国際条約の理念に基づく湿地の保全やその賢明な利用について学びました。そして、これらの事例から得たアイディアを、湿地保全に関するワークショップや地域の学校を対象とした環境教育活動など、自国の風土や社会事情に即した事業案にまとめ、研修の最後に発表しました。

このほか研修中にはホームビジットなどの機会もあり、研修員は日本の家庭や家族について知るとともに、地域の人々と交流を深めました。



国際協力2 「自然・文化資源の持続可能な利用(エコツーリズム)」研修

2010年9月6日(月)から10月13日(水)まで、JICA帯広国際センターによる集団研修「自然・文化資源の持続可能な利用(エコツーリズム)」研修を受託しました。

3か年で実施されるこの研修コースの初年度となる2010年は、6カ国(アルゼンチン、ケニア、スリランカ、タイ、ウガンダ、ベトナム)より、自然公園の運営や観光振興に携わる国家・地方の中堅行政官8名が参加しました。

環境に配慮し、その土地の自然や文化を楽しむ旅行「エコツアー」は、地域の自然・文化資源を保全しつつ、持続的に活用する地域開発手法のひとつとして、近年特に途上国で注目されています。研修員はエコツーリズムの理論や環境関連法に関する講義を受け、東北海道の豊かな自然や漁業・酪農などの既存産業を活用したツアーの実習や体験プログラムのほか、華道の精神と技術を活用した京都における環境保全の事例紹介等を通じ、エコツーリズムに関する多面的な学習を行い、知識や経験を広げることができました。

研修では、釧路のボランティア団体の協力による地域住民との交流プログラムや、小学生ガイドの案内する霧多布湿原でのエコツアー体験、京都でエコツーリズムを学ぶ大学生との意見交換会など、さまざまな年代や社会の人々とふれあう機会がありました。

研修員には帰国後、学習の成果として研修の最後で各自が発表した活動計画案を実現し、エコツーリズムの導入を進めることが期待されています。



日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ19 ～漫湖(沖縄県)

漫湖は、沖縄本島の南部、那覇市を流れる国場川と豊見城市を流れる饒波川の河口部に位置する県内最大級の泥干潟です。海から3km上流の内陸にあり、市街地の中に取り込まれたように位置しており、潮の干満の差の影響を強く受け、干潮時に最大47haの泥質干潟が出現します。

河口にあたる、那覇港は、中国との交易船の出発地点、「漫湖」という名前は、1600年代半ば雄大に広がる美しい湖面をみた中国からの冊封使(使者)により付けられた名前です。

漫湖の西岸部には、小規模のヨシ原と、メヒルギ、ヤエヤマヒルギ、オヒルギなどのマングローブ林が広がっています。また、干潟の汽水域に特有な稚魚やカニ、ゴカイなどの底性生物が豊富な漫湖は、水鳥にとって日本列島を北上、南下する重要な中継地となっています。ムナグロ、ハマシギ、ダイシャクシギなどのシギ・チドリ類を中心にクロツラヘラサギやツクシガモなど希少種も多く見られます。しかし、近年水鳥の飛来数が急激に減少しており、漫湖における最重要課題となっています。その大きな要因として、土砂の流入や治水のための浚渫による河道の固定が干潟への土砂の堆積を進め、そこへマングローブが急激に繁茂したことで、干潟面積が減少したことと、干潟の底質の変化によるエサとなる底性生物の変化が考えられています。

現在、国指定漫湖鳥獣保護区保全事業の一環としてマングローブを部分的に除去し水鳥の利用空間を拡げる事業を行っています。これは、試験的にマングローブを伐採し、その調査結果から徐々に水鳥が戻ってきていることが確認されたからです。漫湖におけるマングローブは植林により繁茂しており、コントロールが必要と考えています。

漫湖の今後の課題として、環境省主管の保全事業終了後の継続的なマングローブの管理のあり方や関わり方について検討し、その利活用のためのルールづくりがあげられます。

さらに、環境省、沖縄県、豊見城市と共に管理する、漫湖水鳥・湿地センターにおいて、県内湿地(慶良間諸島海域、名蔵アンパル、久米島の溪流湿地)との連携、次世代を担う子どもたちの育成も重要な課題です。

未来の子供達へこの湿地を引き継いでいけるよう、国、県、市が一体となって漫湖の自然環境を守っていきたいと考えています。

(文・写真 那覇市環境保全課)



水鳥センター横の伐採モニタリングフィールド

発行:釧路国際ウェットランドセンター (KIWC)

〒085-8505 釧路市黒金町7-5 釧路市役所内 KIWC事務局
TEL:0154-31-4594 FAX:0154-23-4651 電子メール:kiwc@kiwc.net
ホームページ: http://www.kiwc.net
「こどものページ」: http://www.kiwc.net/child/

Issued by Kushiro International Wetland Centre

March 2011



KIWC newsletter

CONTENTS

釧路湿原ラムサール条約登録30周年記念事業	1・2	会議・イベントへの参加、講演	3
KIWC技術委員会の活動	2・3	JICA(国際協力機構)関連の事業	4
冬のエコツアー2011	3	日本のラムサール登録湿地	4

*****2011年はラムサール条約40周年です*****

釧路湿原ラムサール条約登録30周年記念事業

(財)北海道環境財団の「アサヒスーパードライ"うまい!を明日へ!"プロジェクト」による寄付記念助成事業

釧路湿原のラムサール条約登録30周年を記念し、地元では行政機関やNGOなど、さまざまな団体が2010年に多くの記念事業を行いました。KIWCも調査やイベントを通じ、登録後30年間の人々と釧路湿原とのかかわりを、生物多様性やワイズユースの視点からふりかえるとともに、今後の湿原とのつきあい方について、参加者と一緒に考えました。

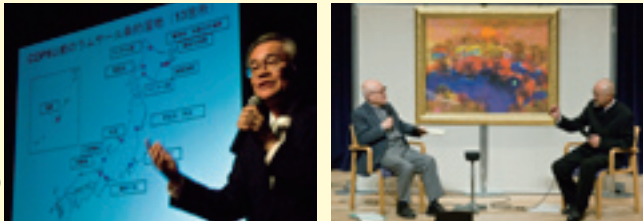
記念事業1 釧路湿原ラムサール条約登録30周年記念イベント「湿原たからばこ」開催

ラムサール条約登録湿地となってから30周年を記念するイベント「湿原たからばこ」を、環境省釧路自然環境事務所、NHK釧路放送局との共催で2010年12月19日(日)に開催しました。釧路湿原を地域の「宝の箱」と考え、将来にわたり引き継いでいくために何が必要かを考える場とするために開催したものです。

釧路市民文化会館の小ホールや展示ホールを会場に、釧路湿原に係わるNGOや行政機関等の活動紹介展(28団体)や、過去の経験を活かして、湿原の未来を考えるシンポジウムなどを開催しました。

シンポジウム「未来へはばたく釧路湿原」

- ☆ 講演「ラムサール条約と釧路湿原」
講師：名執芳博(国連大学高等研究所上席研究員)
- ☆ トーク「未来のこどもたちのために～釧路湿原の自然再生」
対談：辻井達一(北海道環境財団理事長、KIWC技術委員長)
新庄久志(環境ファシリテーター、KIWC主任技術委員)
- ☆ 釧路湿原自然再生協議会こども発表会
発表：北海道標茶高等学校「釧路湿原再生プロジェクト2010」
こどもエコクラブくしろ「釧路湿原でのエコ活動」
川村礼実(北海道釧路湖陵高等学校)「釧路湿原の未来を考える」
- ☆ 発表者の子供達によるパネルディスカッション
コーディネーター：高橋忠一(元 北海道教育大学釧路校教授)
アドバイザー：名執芳博、辻井達一、新庄久志
瀬川卓磨(北海道標茶高等学校教諭)
佐々木誠治(こどもエコクラブくしろ代表)



師走の慌ただしやや積雪による悪路にもかかわらず、地域の住民など約300名が参加しました。ブース展示会場には関係する行政機関はもちろん、釧路湿原で積極的に活動する民間団体の多くが出展し、活動を紹介するパネルや展示物に熱心に見入る来訪者も目立ちました。また、今年はラムサール条約登録30周年を記念したイベントが地域の中でもさまざまに行われたため、会場では関係者同士で情報交換する姿も見られました。

シンポジウムでは、国連大学高等研究所の名執芳博さん[(財)長尾自然環境財団]が釧路湿原保全の経緯を紹介後、それぞれKIWCの技術委員長と主任技術委員でもある、辻井達一さんと新庄久志さんが、これからの湿原の利用をテーマに対談、気球の活用や湿原探検など斬新なアイディアが二人から提案されました。これに続くこども発表会とパネルディスカッションでは、地元の小学生や高校生が、湿原植物を利用した水質浄化の研究や外来生物駆除、子供達のラムサール湿地間の交流活動等を通じて感じたことや、これからの湿原とのかかわり方について発表し、若い世代からの意見を述べました。

会場ではその他、地元の人気フォークデュオ「ヒートボイス」の湿原キャンペーンソングのミニライブ、「湿原の画家」として有名な佐々木榮松画伯の作品の紹介、釧路湿原の巨大空撮地図の展示、湿原関連グッズの物販など、イベントのテーマ「たからばこ」の名のとおりバラエティに富んだ催しが行われました。



March 2011



記念事業2 市民参加による環境調査～みんなで調べる復元河川の環境・2010～

KIWCは釧路湿原への関心を高め、自然再生事業への理解を深めるため、釧路湿原の茅沼地区で現在進行中の釧路川蛇行復元事業の現場で、地域住民の参加による環境調査を2010年の夏・秋の2回行い、この年の2月に通水されたばかりの旧流路（蛇行復元河川）とその周辺域の環境の変化を調べ、自然再生事業により期待される効果について考えました。

第1回調査（夏）

釧路湿原の茅沼地区（標茶町）で、市民を対象とした環境調査を2010年7月24日（土）に行い、28名が参加しました。

新庄久志さん（KIWC主任技術委員）、針生勤さん（釧路市立博物館学芸主幹・KIWC技術委員）高嶋八千代さん（同技術委員）、照井滋晴さん（環境把握推進ネットワーク代表・同技術委員）の指導をうけながら、釧路川の蛇行復元河川の後半部と、そこから続く自然河川の左岸約1.3kmの区間において、水生生物や植生、河畔の土壌の構成などを調べました。その結果、30年前の河川直線化の後、川の上流から運ばれた土砂が堆積した状況や、氾濫による冠水の程度により、河畔に生える植物が異なることなどが確認できました。ここから、かつて直線化されたことで、川と周囲の自然にどのような変化が起きていたのかを考察し、古い流れに戻されたことで、環境へどのような効果が期待できるのかを皆で考えました。



釧路川の蛇行復元

釧路湿原国立公園の北端部、茅沼地域を流れる釧路川中流の一部は、1980年代に治水と土地利用を目的として直線化されました。1980年に釧路湿原がラムサール条約登録湿地に、さらに1987年には国立公園に指定される中で、人々の関心は自然の開発から保全へと移っていきました。

また、川の直線化による土砂流入が原因とみられる、湿原中心部の乾燥化や植生の変化などの問題が目立つようになったものも頃でした。

釧路湿原の急激な環境の変化を受け、2003年に釧路湿原自然再生協議会が発足し、官民の参加による自然再生事業が本格的に始まりました。その一環として2007年から釧路川の直線化部分約2kmを元の流路へ戻す工事が行われ、2010年2月に旧河川の蛇行が復活しました。



第2回調査（秋）

2010年9月25日（土）に行われた秋の調査では、カヌーを用いて、蛇行復元河川の後半部から直線河川との合流地点を経た自然河川までの区間約5.5kmで、河岸の堆積土壌の調査や、流域の自然観察を行いました。小中学生から年配の方まで幅広い世代の27名が参加し、新庄久志さん（KIWC主任技術委員）の指導のもと、砂洲に上陸してその大きさを測り、前回の調査時からの変化を調べたり、堆積土壌の成分から過去の土砂流入の状況や、今後予想される変化について皆で予想しました。

また、舟の上からは、兩岸の河畔林の樹種や景観が次第に変わっていく様子や、シベリアから渡ってきたばかりのヒシクイの群れなどの野生動物が観察でき、木の葉が色づき始めた秋の湿原の自然を十分に楽しむことができました。

上陸後は塘路湖エコミュージアムセンターで、調査でわかったことや川下り中に発見したものなどを付箋に記入し、地図上に貼り付けて「自然情報地図」を作り、全員で調査の内容をふりかえりました。

これら2回の調査の概要と考察はパネルにまとめ、12月19日（日）に開催されたイベント「湿原たからばこ」展示コーナーのKIWCブースで紹介しました。

記念事業3 年表「釧路湿原のあゆみ」

江戸時代から現在に至る、釧路湿原に関する出来事をまとめ、縦150cm、横幅70cmの垂れ幕3枚からなる年表「釧路湿原のあゆみ」を製作しました。全部で約130件の歴史上の出来事が記録されており、釧路湿原や釧路川における開発と治水、保全のおおまかな経緯を知ることができます。2010年12月19日（日）に開催された釧路湿原ラムサール条約登録30周年記念イベント「湿原たからばこ」の会場で展示し、参加者の関心を集めました。（年表の内容はKIWCのサイト <http://www.kiwc.net/a/nenpyo.pdf> で見るができます）

KIWC技術委員会 2010～2012年度の新規活動開始

KIWCは、湿地の保全とワイズユースを進めるため、専門家による技術委員会を組織し、研究やモニタリングを通してデータベースの構築をはかるとともに、湿地の管理に関して技術的な助言を行うため、3年ごとに個別のテーマを定めた調査研究を実施しています。

釧路地域では釧路湿原の自然再生事業など、水環境の修復について国内でも先進的な取り組みが進行中ですが、2010～2012年度は「生物多様性の観点からみた住民参加による水環境の修復」について、辻井達一委員長以下10名の委員が、生物多様性の面からみた環境修復のあり方を検証するとともに、このような息の長い取り組みを続けていくために不可欠な、地域住民の積極的な事業参加や、そのための普及啓発の手法について、事例研究を中心とした活動を始めました。2010年は、KIWCが企画した釧路川の蛇行復元現場での市民の参加による環境調査を事例とし、調査に先立つ6月10日（木）に委員ら21名による現地検討会を行い、データの収集と普及啓発の両方の面から、調査の内容や手法を検討しました。

委員からは現地の視察後相次いで具体的な助言や提案が出され、これを元に同年7月と9月に市民環境調査が行われました。



KIWC技術委員（2010～2012年度）

（敬称略 50音順 所属役職は2011年3月現在）

技術委員長	辻井達一	（財）北海道環境財団理事長	蛭田真一	北海道教育大学釧路校教授
主任技術委員	新庄久志	環境ファシリテーター	若菜勇	釧路市教育委員会阿寒生涯学習課課長補佐
技術委員	河原淳	霧多布湿原センター館長		（阿寒湖畔エコミュージアムセンター マリモ研究室）
	澁谷辰生	厚岸町環境政策課専門員（厚岸水鳥観察館）	若山公一	温根内ビジターセンター指導員
	高嶋八千代	植物研究家		
	照井滋晴	NPO法人環境把握推進ネットワーク代表		
	針生勤	釧路市立博物館学芸主幹		

普及啓発1 世界湿地の日記念「冬のエコツアー2011」

世界湿地の日（毎年2月2日）を記念して、2011年1月29日（土）に地域住民を対象とした「冬のエコツアー2011」を実施しました。幼稚園・小学生の子供達5名を含む、ツアーの参加者とスタッフあわせて24名でSL列車「冬の湿原号」に乗り、車窓から湿原を見ながら釧路町細岡の「釧路湿原駅」を訪れました。

一行は、KIWC技術委員でもある環境ファシリテーター新庄久志さんの案内で駅周辺のハンノキ林や沢地を散策し、湧水や湿原の植物・スゲがつくる「ヤチボウス」、動物の足跡などを観察しながら冬の自然を楽しみました。この周辺は、緑の季節には草木が生い茂り、地面も水浸しとなるため、地表が凍る厳冬期のみ立ち入り可能な場所とあって、子供達はもちろん、年配者までがまるで探検家のように、青空のもと白い雪がまばゆい湿原のあちこちを歩き回りました。

2011年の世界湿地の日のテーマは「水と湿地のための森林」でしたが、湿原周辺の林から湧き出た水が流れ込んで湿原を潤していることや、周辺からの流入水や土砂が湿原の植物の成長と深くかかわっていることなど、森林と湿原のつながりが実際に目で確かめられました。

細岡ビジターズラウンジで昼食・休憩後は、渡辺寿さん（同ラウンジ館長）の指導をうけながら「ウッドレター」作りに挑戦しました。ウッドレターは北海道をかたどった板に、イラストやメッセージなどを彫刻刀で彫る「木の葉書」で、参加者はツアーの思い出をそれぞれレターに刻みつけ、お土産作りに夢中になっていました。

真冬日に雪中を歩く内容でしたが、参加者からは「おもしろかった」「また参加したい」という声をたくさんいただきました。毎年、場所やテーマを変えて行っているこのツアーは大変人気があり、今回も受付開始後すぐに定員に達するほどでした。リピーターにも毎回新たな発見をしてもらえるように工夫をしつつ、地域の人々とともに湿原を訪れる機会を増やしていきます。



普及啓発2 湿地・生物多様性関連の会議・イベントへの参加、講演など

エコライフ・フェア2010「湿地の恵み展～ラムサール条約湿地の観光と物産（主催：環境省）」

2010年6月5日（土）・6日（日）、東京都の代々木公園で開催された環境省の主催の「エコライフ・フェア」の会場に、ラムサール条約登録湿地関係市町村会議等の運営によるブース「湿地の恵み展～ラムサール条約湿地の観光と物産」が設けられました。KIWCもこのブースにポスターやパンフレット、環境教育キット等を掲示・配布し、釧路地域の登録湿地の自然や観光、保全活動などをPRしました。

くしろエコ・フェア2010 in遊学館（主催：くしろエコ・フェア2010実行委員会）

2010年6月5日（土）・6日（日）に釧路市こども遊学館で開催された「くしろエコ・フェア」の特別企画として、KIWCの齊藤さゆり研究員による講演「釧路湿原のエイリアン・ミンクを中心とした外来生物の話」を行いました。KIWCが前年実施した調査をもとに、釧路地域におけるミンクの分布や生態などを紹介し、外来生物の問題について解説しました。



環がまちフェスタ2010（主催：釧路市、くしろエコ・フェア実行委員会）

2010年9月23日（木）、釧路市観光国際交流センターで開催されたこの催しでは、環境保護団体やボランティア団体によるブース展示や「環境カルタ」大会やアトラクションなどさまざまな催しが行われ、KIWCも「タンチョウ・オオハクチョウ紙飛行機」製作体験や釧路湿原の生き物カードゲームなどのブースを出展しました。



生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）・生物多様性交流フェア（主催：同会議支援実行委員会）

2010年10月に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議にあわせ、10月11日（月）から29日（金）まで展示会「生物多様性交流フェア」が、会議場に隣接した会場で開催されました。KIWCでは日本の環境省ブース内のラムサール条約登録湿地紹介展示コーナーで活動を紹介したほか、北海道のNGO/NPOを紹介するブースにもタンチョウ・オオハクチョウの紙飛行機キットを出品しました。



ラムサール条約40周年記念シンポジウム「湿地の恵み展」（主催：環境省）

2011年2月2日（水）に東京の国連大学で開催された「ラムサール条約40周年記念シンポジウム」に、KIWCから神谷賢尚事務局次長が参加し、地域住民を対象とした普及啓発の取り組みとして、釧路湿原ラムサール条約30周年記念事業をはじめとする活動を紹介しました。また、同時開催された「湿地の恵み展」にも出展し、ワカサギ佃煮や阿寒湖百年水など、釧路の湿地の恵みをPRしました。



講演「釧路湿原の自然とラムサール条約」とパネル展（主催：シルバーシティときわ台ヒルズ）

2011年3月6日（日）に、釧路市内の介護付有料老人ホーム「ときわ台ヒルズ」が開催する自然文化講座で、KIWCの菊地義勝事務局長が「釧路湿原の自然とラムサール条約」について講演を行いました。このホームでは入館者や地域の人々を対象に、いろいろな教養を高める催しを行っていますが、この日は湿原や動植物の写真を交えつつ釧路湿原の魅力を紹介し、ラムサール条約について解説するとともに、湿原の大切さを一緒に考える集いとなりました。また、講演にあわせて3月中の1か月間、釧路湿原やKIWCの活動を紹介するパネル約20点が館内に展示されました。

